

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 13 日現在

機関番号：12606

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370159

研究課題名(和文) 森山威男のフリースタイル奏法のデジタルアーカイブ作成および対話を通じた分析と考察

研究課題名(英文) Making the video archive, and analysis and examination through dialogues on the freestyle drum play of Takeo Moriyama

研究代表者

松野 誠(長谷部浩)(Matsuno, Makoto)

東京藝術大学・美術学部・教授

研究者番号：10323768

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：フリー・スタイルであるのにスイングするという独特の演奏法を編み出し、1974年のヨーロッパ公演では爆発的な反響と評価を勝ち取った「初期山下洋輔トリオ」の技術構成について、ドラマーである森山威男氏のドラミングを撮影することを通じて解明した。フリー・スタイルであるのにスイングする秘訣は、固定したメンバーと演奏を繰り返し、ビートや楽譜ではなく「間」を共有することにある。それを実証するために、森山・山下、森山・坂田のデュオを収録した。本研究の成果は追加画像も含めてヤマハ・ミュージック・エンターテインメント・ホールディングスから今年中に出版される予定で、鋭意編集集中である。

研究成果の概要(英文)：We have recorded and analyzed Takeo Moriyama's technique of freestyle drum play, which enabled early Yosuke Yamashita trio to swing and win the sensation and remarkable evaluation at their European tour in 1974. The main reason why their play swung in spite of the freestyle was that they repeated playing with fixed members and share the sense of appropriate timing without beat or musical scores. To demonstrate it, we recorded two duos, Moriyama/Yamashita and Moriyama/Sakata. We are looking forward to publishing this achievement from Yamaha Music Entertainment Holdings this year.

研究分野：美術評論

キーワード：初期山下洋輔トリオ 森山威男 間 フリースタイル・ドラミング

1. 研究開始当初の背景

森山威男(1945年～、東京藝術大学打楽器科卒)氏はながらく日本で第一人者と評されるジャズ・ドラマーである(2002年には第56回文化庁芸術祭賞レコード部門優秀賞、ジャズ界にもっとも貢献した者に贈られる第27回南里文雄賞)。森山氏の現在の演奏スタイルはおおむね4ビートであるが、「山下洋輔トリオ」在籍時(1969-75)のそれはジャズ史上他に比類ない唯一無二の「フリースタイル」であった。同トリオは実質的に森山氏をリーダーとするもので、1974年には初登場となるメールス・ジャズ祭(ドイツ)において観客を圧倒、一時間に及ぶスタンディング・オベーションを受け、世界的な評価を確立した(Yosuke Yamashita trio『CLAY』ENJA,1974に収録)。

森山氏は後に自己のグループで4ビートに転じるが、以前のフリースタイルは欧米でも日本でも継承されず、現状では絶えた状態となっている。理由の一つには、森山氏のフリースタイルは固定したトリオのメンバーでの演奏を連日重ねることで練り上げたものであり、他の演者と交流を頻繁には行わず、技術が普及しなかったことがある。また二つには、身体化され暗黙知となった技術につき、最近まで森山氏自身が言語化する段階に達していなかったことがある。

松原は、身体化されてはいるが言語化されていない柔道家の技術につき、対話の中で表れた断片的な動作を映像に収録し、編集によってつなぎ合わせ体系化するという作業を行った経験を有している(柏崎克彦著・松原隆一郎編『東大生のための柔道寝技技術入門』)。著名柔道家は試合映像や自身で意識し言語化した技術については記録を残しているが、それでも万人が継承しえない部分がある。身体化された技術には、当人にも曖昧にしか意識されない動作が含まれるからである。演劇・歌舞伎にかんしては長谷部が蜷川幸雄・坂東三津五郎との対話を通じ芸談を文章化している(『演出術』『坂東三津五郎 踊りの愉しみ』)。亀川は過去の科研課題に「貴重音響資料デジタル化の試み」とあるように、デジタル化の専門家である。

本研究は、4ビートとの違いを含めてフリースタイルの原理原則を言語化する段階に達したという森山氏の発言を松原が聞いたことに端を発している。そこで松原は長谷部・亀川に相談を持ちかけ、長谷部を代表者とする共同研究チームを組織することとなった。本研究は東京芸大の音楽環境創造科のスタジオを用いつつ、我が国現代音楽界の財産とも言える森山氏のフリースタイル技術がどのような仕組みを有するのか、氏自身が詳細に分析する様子を記録するものである。記録の方法としては、対話者の質問に答える形で森山氏が随時実演を交えつつ、自己のスタイルを分析する。実演に際しては、ドラムセットのすべての部位と演者の手足各部を

最新の映像技術で撮影する。さらに収録後の編集により、談話におけるありうべき矛盾や欠落を洗い出し、再度撮影を行って、最終的な成果物は理解しやすいものとする。

成果物は、電子書籍としては発言を活字化し、(映像)マークをクリックすれば演奏を多様な角度から視聴でき、参考譜面も掲載するものとする。また英語版も用意し、広く内外の後進演奏者・研究者に向け公表する。別の版として、映像・字幕・譜面から成るものも作成したい。

2. 研究の目的

日本を代表するジャズ・ドラマー・森山威男氏が「山下洋輔トリオ」在籍時に編みだし、世界的な評価を得たフリースタイルの演奏技術は、現在は継承する者もなく、当人の身体に暗黙知として埋め込まれたままとなっている。本研究では、森山自身が対話を経ながらフリースタイルの分析と実演を遂行し、ドラムセットの各部に設置したマイクと撮影器機によってその技術の全貌を捉える試みである。成果は電子書籍としては発言を活字化し、随時映像により演奏を視聴できるようにする。また英語版も作成する。映像を主とする版も制作し、こちらには英語字幕と譜面を付して、ともに広く海外にも公表する。

3. 研究の方法

ジャズ演奏の映像は舞台でのものは無数に存在するし、教科書は映像も含むDVDとして出版されてはいる。しかし最前線の演奏技術にかんして技術を分析したものとなる山下洋輔「ブルーノート研究」など少数があるのみで、それも活字と譜面から成る業績であり、身体の動きが十分に理解できるほど演者の手足を複数の固定カメラで撮影した記録画像は存在していない。森山氏に在籍時の山下トリオにかんしても、CDに数枚収録されているだけで、映像は舞台での演奏が数分間ドキュメンタリー映画(田原総一郎「バリエーションの中のジャズ」)やドイツのテレビ局が収録したものとして残るのみである。今回の収録は日本が世界に誇るジャズ・スタイルでありながら忘却されてきたYosuke Yamashita trio『CLAY』等の演奏スタイルの分析・保存という意味がある。

対話を通じ、話者が必ずしも意識できていない知識を拾い上げる方法として、歴史研究においては関係者から直接に話を聞き取る「オーラル・ヒストリー」がある。また産業界においても団塊の世代が大挙して引退するに際し、画像解析などによって熟練技術・技能(ノウハウ)の伝承が各企業で図られてきた(「技術・技能伝承への取り組み」『FRIコンサルティング最前線』vol1.富士通総研2008等)。

音楽方面においても身体化された暗黙知の保存としては、伝統芸能や無形文化財などにかんして映像が残されてはいる(高橋 宏

明「東南アジアにおける無形文化財の保存に関する一考察-映像記録作成の意義とその可能性を中心として」『カンボジアの文化復興』上智大学アジア文化研究所 1996)。しかしそうした試みの大半は舞台での実演を収録したものであり、演奏者自身が対話を通じて自己の技術を分析し、多数のカメラの前で実演した記録や研究は前例がない。また森山氏のフリースタイル(第一期・山下洋輔トリオ)は聴衆から絶大な支持を得た割には継承する者がおらず、いかなる構成を有したのか本人以外には理解されてこなかったものである。本研究ではその演奏の構成を基礎から解明し、4ビートや他のフリースタイルとの相違も明確にしつつ、記録し保存する試みである。

本研究は、世界から高い評価を受けた「山下トリオ」の演奏につき、森山威男氏が対話を通じてその構成原理を分析し、演奏を映像化して後世に残そうとするものである。本研究は演奏者自身による分析を、対話を通じて深めるもので、唯一無二の音楽的営為の解明と保存という意味でも大いに意義ある。さらに言えば、これまでの無形文化財の保存は舞台等の実演がおおよそ対象とされており、実演者の意識していない動作も含む一挙手一投足を複数台のカメラで同時に収録することは行われていない。しかしそれだけだと、複雑精妙な動作のすべてを観察するのは困難である。本研究と同様の分析・保存は他の音楽芸術のみならず邦楽や舞踊・舞台芸術にかんしても応用しうるものであり、芸術・技能の保存技法の開発という点でも意義ある試みといえる。

4. 研究成果

動画 東京大学・東京芸術大学にてシンポジウムで公開。主催はアメリカ太平洋研究センター。「研究の目的」において我々は、フリー・フォームであるのにスイングするという独特の演奏法を編み出し、1974年のヨーロッパ公演では爆発的な反響と評価を勝ち取った「初期山下洋輔トリオ」の技術構成について、ドラマーの森山威男氏のドラミングを撮影することを通じて分析するとしていた。

また「研究実施計画」においては、シンポジウムを開催し、成果を公表するとしていた。撮影の成果は動画「森山威男 スイングの核心」として完成した。内容は、世界のジャズ界において高く評価される水準のものになったと自負している。

しかも研究の途上において当初は想定していなかった山下洋輔氏、坂田明氏の協力が得られたため、共演の動画を収録、アイコンタクトを撮影することで、フリー・フォームなのにかに「合わせる」のかを解明することに成功した。山下・森山・坂田の「初期山下洋輔トリオ」についてはこれが稀少な実演動画となった。

シンポジウムは、当初予定していた東大駒場(2016.11.20)に加えて、東京芸大でも実現(2016.10.13)した。東大の成果は活字として雑誌『アメリカ太平洋研究 vol.17 April 2017』(東京大学アメリカ太平洋地域研究センター)に収録した。

また、本研究の成果は追加画像も含めてヤマハ・ミュージック・エンターテイメント・ホールディングスから今年中に出版される予定で、鋭意編集集中である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕(計3件)

シンポジウム『森山威男 スイングの核心 1970年代日本におけるフリージャズの創造』共催
松原隆一郎、長谷部誠、マイク・モラスキー、森山威男、東京大学アメリカ太平洋研究センター主催、東京大学駒場キャンパス
(2016.11.20)

『アメリカ太平洋研究 vol.17 April 2017』(東京大学アメリカ太平洋地域研究センター)掲載
シンポジウム『森山威男 スイングの核心 1970年代日本におけるフリージャズの創造』における報告/討論

DVD 出版
ヤマハ・ミュージック・エンターテイメン
ト・ホールディングより年内に出版予定

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松野 誠 (長谷部浩) (MATSUNO, Makoto)
東京藝術大学美術学部・教授
研究者番号: 10323768

(2) 研究分担者

亀川 徹 (KAMEKAWA, Toru)
東京藝術大学音楽環境創造科・教授
研究者番号: 70359686

(2) 研究分担者

松原 隆一郎 (MATSUBARA, Ryuichiro)
東京大学大学院総合文化研究科・教授
研究者番号: 90181750

(4) 研究協力者

森山 威男 (MORIYAMA, Takeo)